

かささぎ通信 第117号

毎月第2金曜日 13:30~15:30

2022年 9月 9日 発行

刈谷市中央図書館研修室 参加自由

森三郎刈谷市民の会「森三郎の作品を読む会」

二〇二二年七月「森三郎の作品を読む会」では、「梅の木」の読み比べ（『赤い鳥』1933.1と少国民文芸選『かささぎ物語』[1942.8] 帝国教育会出版部）をしました。その後「向日葵（ひまわり）」（『うぐひすの謡』[1943.8 拓南社] 所収）を読みました。

「梅の木」については「かささぎ通信」第25号、71号、79号でたびたび取り上げてきました。『万葉集』巻五の山上憶良の歌を題材にした話です。元号「令和」の発表の時に話題になった、天平二年正月十三日の大伴旅人邸での梅花の宴の際の歌、

818 春されば まづ咲く宿の梅の花 ひとり見つゝや 春日暮らさん
「古日」という名の男の子の死を悲しんで詠んだ歌、

905 若ければ道ゆき知らじ まひはせむ したへの使 負ひて通らせ
の二首の歌が話の中に出てきます。

「梅の木」は奈良の郊外の屋敷の一本の梅の木が見た二つの家族の話です。この屋敷の持ち主藤原冬彰は梅の花には関心がありませんが、梅の実が大好きで、熟したころには毎日楽しみに食べていました。父親に似て六歳の息子の魚鷹も毎年、竹竿で梅の実を落しては喜ぶ元気な男の子でした。この一家の転居の後、引越してきた歌詠みの山上憶良の一家は、きれいな花をつけた梅の木を見て大変喜びました。しかし梅の実には興味を示さず、魚鷹と同じくらしい年の少年・古日も実を落とそうともしないので、梅の木はがっかりします。次の年に花が咲くと憶良は「春されば」の歌を詠みます。生れて初めて、自分の事を歌に詠んでもらった梅の木はうれしくてたまりません。元々病弱であった古日はやがて床につき、秋には祈祷の甲斐もなく幼い命を落とします。憶良はその死を悲しみ、「若ければ道ゆき知らじ」の歌を詠みました。再び梅の木のある屋敷に戻って来た冬彰一家は、梅の実がなっている梅の木を見て喜びました。すっかり大きくなった魚鷹が、まだ青い梅の実を元気づくたたき落す姿に、梅の木は亡くなった古日のことを思い、涙ぐみました。

A『赤い鳥』版とB『帝国教育会出版部』版とは、一見、大きな違いは

ないようですが、比べ読みをしてみると、古日が亡くなった後、梅の木の前に立って母親が語る言葉には大きな違いがある事に気づきました。

A 「お父さま、まだ申しあげませんでしたけれど、古日が去年の夏、梅の実をほしがりまして、いつになく、むづかりました。いけません、おなかにわるいからと、よく言ひきかせましたけれど、かうなりますものなら、黄色いのを一つ、せめて手にもたせてやればようございました。」

B 「お父さま、もうこんなにつぼみが附いてあますわ。」「この花の開くのをもう一度あの子に見せてやりたうございます。」

『赤い鳥』版で、病弱な古日が梅の実を欲しがってむづかったのは、子どもらしい姿を象徴しているような気がしますが、『赤い鳥』の目指す方向と言えるかもしれません。梅の木は母親の話を聞きながら、古日が元気になって、魚鷹のように自分で梅の実を落としてはしゃぎ、美味しそうに食べる姿を想像していたことでしょう。

九年後の「帝国教育会出版部」版の「梅の木」は歌詠みの憶良に対する尊敬の念がより鮮明になっていて、大げさな言い方ですが、三郎の創作活動が詩情を大切にしている方向へ変化しているような気がします。

次に読んだ「向日葵（ひまわり）」は三郎の「あとがき」によると、「蘆屋少女」伝説と宝塚少女歌劇脚本（小林一三「桃色鸚鵡」）に着想を得た、三郎の創作です。山の乙女の葵を巡って、東の朝日の国の殿様と、西の夕日の国の殿様とが妻争いをします。両者を不幸にしないために葵は結婚を断つたのに、葵の意に反して両者が争い、何もかも無くなります。その後、山の上にはお日さまの動きに合わせて首を向ける黄金色の大きな花が咲きました。人々はそれを向日葵と呼んだのです。平和を願ってひまわりが空に向かって咲く姿は現在にも通じて印象的でした。

次回予定 二〇二二年十月十四日（金）午後一時半〜三時半

① 読み比べ 「笛」（『赤い鳥』[1933.2] 所収）と『かささぎ物語』

[1942.8] 帝国教育会出版部所収）

② 「おどけ百人一首」（『うぐひすの謡』[1943.8] 所収）